イエスの再臨

2025年9月23日/24日

ジョシュア・ムラケラ

イエスの再臨 2025年9月23日/24日

草稿翻訳のみ

2025年7月6日、Truth Limited社により英語原文が初版発行されました。

この出版物の無料版は、インターネットアーカイブからダウンロードできます。

このメッセージの内容は、理論的に非常に衝撃的で普遍的であるため、この電子書籍は著作権を考慮することなく、あらゆる言語や方言に自由に翻訳され、同様に世界中のどこにでも自由に配布されることが求められます。

発行者より

イエス・キリストは、グレゴリオ暦の 9 月 23 日または 24 日にキリスト教教会を連れ去るために再臨されます。この 2 つの日付は、イスラエルのラッパの祭り、そしてユダヤ教の宗教的新年（ロシュ・ハシャナ）の始まりである 5786 年にあたります。教会用語では、これは待望の教会の携挙であり、イエスと教会を処女の「花嫁」とする霊的な結婚に例えられています。それは瞬く間に世界のすべてのタイムゾーンで起こり、国際宇宙ステーションにいる人々も例外ではないでしょう。何百万人もの人々が跡形もなく消え去り、くしゃくしゃになった衣服を残し、残された世界は 7 年間の艱難時代へと突入します。そして、その艱難時代はイエスの再臨で終わりを迎えます。今度は、イエスは 2032 年 9 月 15 日、ユダヤ教の贖罪の日（ヨム・キプール）に公然と再臨し、エルサレムから万王の王、万主の主として全地を統治します。

ヨハネスブルグ在住のジョシュア・ムラケラ氏の証言は、元クリスチャン新聞記者によってここに記されています。これは、ジョシュア兄弟が出演する 2 つの YouTube ポッドキャスト、「God's Voice Daily」と「Centwinz」に基づいています。これらは 2025 年 6 月に配信されました。それ以来、彼の証言は、同じ南アフリカ出身のキリスト教徒の姉妹の証言によってさらに強められてきました。その姉妹は今日、イエスが、来たるラッパの祭りで必ず再臨されるという確証を記した声明を彼女に口述したと証言しました。マラン・アサ！

私の名前はジョシュア・ムラケラです(Joshua Mhlakela)。ヨハネスブルグに住んでいますが、ケープタウン出身です。私はイエスを信じており、今日、主が私に遣わされたことを世界に伝える準備ができています。私は使徒でも牧師でも司教でもありません。ただ、血によって清められ、生まれ変わったイエスの信者です。私は何年も主と共に歩んできました。ですから、私は主を個人的に知っていると言えます。皆さんにお伝えしたいのは、携挙はもうすぐそこまで来ているということです。たとえあなたがまだその準備ができていなくても、それはあなたのために準備されています。

1982年に私が生まれる前、父は夢の中で私にジョシュアという名前をつけるように告げられました。胎児の性別を判別する技術がまだなかった頃のことです。しかし、出産時の合併症のため、医師は両親に私が死ぬか怪我をして生まれるだろうと警告しました。最終的に何の問題もなく生まれたとき、その医師は私を奇跡の子だと宣言しました。

私が生まれたその日、母は私をうつ伏せに寝かせていた時、自分を絞め殺そうとする霊的な力が襲ってくるのを感じました。その力に抗おうと、母は私がうつ伏せになっていることを忘れ、体をひっくり返そうとしました。もしひっくり返っていたら、私は床に倒れて怪我をし、おそらく致命傷になっていたでしょう。しかし、神が母に私の存在を思い出させたので、母はしっかりと私を抱きしめ、その霊は消え去りました。

私が4歳か5歳の頃、家族を知る人物に約1ヶ月間誘拐されました。奇跡的に、あるインド人が警察に通報し、警察と両親が駆けつけ、私を救出してくれました。知らない場所の玄関に座り、一日中ただ泣いていたあの頃の記憶が、今も鮮明に残っています。

16歳か17歳の頃、私は自殺願望と闘っていました。自殺したいという強い思いがあり、敵は私にその機会を与えようとしていました。ある時、自殺しようとしたのを覚えています。まさにそうしようとしたその時、神が私を止めてくださったのです。

ですから、私は生まれたその日から死に追いやられていました。人は皆死ぬとよく言われますが、聖書には永遠に死を経験することのない人々がいます。コリントの信徒への手紙一 15章51-52節で、パウロは「私たちはみな眠りにつくのではない」と言っています。つまり、私たちは皆死ぬのではなく、一瞬のうちに、瞬く間に、皆が変えられるということです。私たちは死すべき者から不死の者へと変えられるのです。神は私たちに、決して死なない新しい体を与えてくださいます。ですから、死の霊が私を追いかけていたのだと思います。もしかしたらサタンは、私が将来、神が死なないように選ばれる人々がいると皆に告げ知らせることが、人生における私の使命だと、当時すでに知っていたのかもしれません。ですから、死は私の敵であり、神の敵なのです。

アモス書3章7節には、「主はその計画を、そのしもべである預言者に示さずには、何事もなさらない」とあります。私は預言者ではありませんが、主のしもべです。そして今日、神はその計画を世界の人々にも明らかにしておられます。

2000年に私はクリスチャンになりました。まだ十代の頃、自殺願望と闘い、イエスに人生を捧げました。イエスに出会い、イエスに人生を捧げたのは19歳の時だったと思います。その年、私が所属していた教会では、人々の家を訪ねて祈りを捧げていました。ある午後、家から通りに出ると、私たちの隣に、建物か一番高い木と同じくらいの背丈の天使がいることに気づきました。天使は剣を持っていて、まるで私たちを守るかのように辺りを見回していました。しかし、一緒にいた人たちはそれに気づきませんでした。私はどう

解釈したらいいのか分からなかったので、彼らには何も言いませんでした。とにかく、それが私が生まれ変わったクリスチャンとして初めて霊界を体験した出来事の一つでした。教会へ行ったり帰ったりする時、神の聖霊の臨在に満たされ、目には見えないイエスが隣を歩いているかのように感じることもありました。

2003年、当時通っていた教会で、私は助任牧師になりました。ある夜、夢の中で未来を見ました。暗い夜、私は自分が広い野原に立っているのを見ました。地面を見ると、焼け落ちていることに気づきました。本能的に、焼け落ちたのは自分のいる場所だけではないことを悟りました。地球全体が焼け落ちていたのです！私がいた場所の空気は、ひどく不気味でした。自分がいる場所自体が怖かったのです。暗く恐ろしい夜、この場所にたった一人きりだったので、丘に登って他の人間を探しました。丘に登り、周りを見回しましたが、誰もいませんでした。星空を見上げると、星が見えました。星空を見上げながら、私は心の中で、今ここで目撃している破滅の後に、キリスト教徒は天国に召されたのだと悟りました。そして、私は目が覚めました。目が覚めた後、まるで神が未来を見届け、私を連れ戻してくれたかのような気がしました。

7年後の2010年、私は28歳で補佐牧師を辞任し、「神様、私はあなたに仕え、最善を尽くしました。これからは自分の人生に集中してもいいでしょうか？」と心に誓いました。

翌年、再び夢の中で、私は天国の法廷にいる自分を見ました。私は法廷の扉の外に立っていました。私の前には、文字通り恐怖で震えながら中に入るのを待っている男性がいました。まるで、法廷に足を踏み入れたら、もう助からないと分かっているかのようでした。とにかく、彼はようやく中に入りましたが、その後どうなったのか私にはわかりません。裁判の手続きはあまりにも早く、ほんの数秒で終わりました。

ヘブライ人への手紙9章22節には、「人は一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっている」とあります。ですから、裁きのために法廷に来る人々はすでに地上で死んでいると分かっていましたが、私はまだ死んでいないことを知っていました。そして、今度は私の番でした。法廷にある教会のような座席の一つに座り、裁判官が普段座っている椅子の方を見つめました。そこには神がいました。座っている椅子に座っている神は、とても大きく見えました。半透明だったので、その姿ははっきりと分かりませんでしたが、それでもこれが神であることは分かりました。私の左側には、等身大の人間の体を持つイエスが弁護士として現れました。右側にはサタンがいて、その手には私が犯したすべての罪が詳細に記された分厚いファイルを持っていました。敵であるサタンは、父なる神であり裁判官である神の前で私を告発していましたが、その時、イエスが前に出ました。イエスが前に出た瞬間、私はすべての罪から無罪放免されました。南アフリカでは、法廷で有罪判決を受け、懲役刑を宣告されると、法廷から階段を下り、留置所へ送られ、そこから刑務所に移送されます。これはまさに天国の法廷でした。もし罰せられなければ、地獄への階段を下り、罰せられれば天国へ昇るのです。無罪判決を受けた後、私は天国へ行きました。到着したのは昼間で、人々が座っていました。服装から判断すると、小学生や囚人らしき人たちでした。しかし、彼らは天国にいたのです。彼らは天国に来たのです！

すると、白いローブをまとったイエスが私の前に現れました。私はイエスを法廷に残してきたばかりでしたが、再び天国でイエスを見つけました。幻、あるいは夢の中でイエスを間近で見たのはこれが初めてでした。彼は中東系の風貌で、首筋まで届くダークブラウンの髪をしていました。きちんと整えられた髭をたくわえたハンサムな男でした。私の目を惹きつけたのは、彼の目でした。私は驚き、ただ彼を見つめ続けました。彼の目から目を

離すことができませんでした。私は――英語が母国語ではないので、適切な言葉かどうか分かりませんが――魅了されたのです。愛する創造主が目の前に立っているという実感に、すっかり心を奪われました。彼は私を見ながら、何も言わずに、心を通して命令を下されました。すると戦車が現れ、私の前に整列し始めた。数え切れないほどの数だった。誰も操っていなかった。中には磨き上げられた木片が積まれており、その中には個人名が刻まれているものがほんのわずかしかなかった。イエスは私にこう言われた。これもまた心の中での発言だったが、私にははっきりと聞こえた。「あなたはわずかな人を救っただけだ。」

それから彼は、名前のないたくさんの木のブロックを見て、「これらの木のブロックすべてに魂を注ぎなさい」と付け加えました。そして私は目が覚めました。目が覚めた時、もしかしたら神様は私に魂を救う者となって教会を開くことを望んでいるのかもしれない、と心の中で思いました。最初の夢の時と同じように、またもや天国から戻ってくるような気がしました。そして、まさに神様の存在を身の回りに感じました。

それから5年後、2016年に、私は家の教会を始めました。人々を呼び、彼らが来て、私は彼らのために祈りました。これは約1ヶ月続きましたが、神の言葉を分かち合い、共に祈るためにそこへ行くたびに、心の平安が感じられず、良い気分ではありませんでした。ついに、私は教会員たちに辞めると伝えました。もう家の教会で祈りを捧げる必要はない、と。それから外に出て、帰る準備をしていると、庭で一人の老婦人が私のところに来ました。彼女は私に祈りを捧げてほしいと頼んだので、私は彼女の頭に手を置きました。彼女は目を閉じ、私も目を閉じて彼女のために祈りました。そうすると、手に電撃が走るのを感じました。祈りながら目を開けると、老婦人がそこにいました。しかし、彼女の隣に――私は眠っているのではありません。これは夢ではありません。私は広い野原にいます――イエスが私の目の前に現れ、彼女の隣に立って私を見ていました。しかし、彼は白いローブを着ていませんでした。足元まで届く、青みがかった紺色か、あるいは濃紺色の荘厳なローブを着ていました。広い肩と力強い胸を持つ彼は、とても力強く見えました。彼の胸を見ると、まるで宇宙の銀河のように、そこに銀河が見えるようでした。そして、私はこう思いました。「これこそが、宇宙を一つにまとめているものだ！」そして、彼と顔を合わせていると、彼は微笑んで消えていきました。彼の微笑みは、「よくやった！」と言っているような印象が残りました。この教会を閉鎖するなんて。なぜなら、それは神が私のために立てた計画ではなかったからです。私は教会を開くべきではなかったのです。祈りを終えると、老婦人は目を開けて私に言いました。「あなたが私のために祈ってくれた時、肩から重荷が下りたような気がして、とても軽くなったのをご存知ですか？」私はそれがイエス様の存在によるものだと分かりました。

2016年、別の夢か幻の中で、私は天国でイエス様を見ました。イエス様は同じように荘厳なローブをまとい、円柱が並ぶファサードを持つアメリカ合衆国最高裁判所に似た建物の外に立っていました。そこでイエス様は私にはっきりとこう言われました。「あなたは教会を開いてはならない。私はただ、イエス様を間もなく来られる王として世界に告げ知らせるだけだ。」

2017年、私は夢の中で天国に連れて行かれ、そこでイエス様が玉座に座り、肘掛けに腕を置いているのを見ました。床には、彼の玉座の周りが霧に包まれ、まるで世界に戦争が起こりそうな音が聞こえました。それが私の印象でした。何かとても、とても、とても深刻なことが世界に起こりつつあるのです。私はイエスを見つめました。再び、彼は口を開くことなく、しかし彼の心を通して、彼が私に非常に大きな声で、はっきりとこう言うの

が聞こえました。「私はもうすぐ来る！」そう言うと、彼は肘掛けにつかまりながら立ち上がり始めました。しかし、彼が完全に立ち上がる前に、彼から力が与えられ、数秒のうちに私を天空から無害に吹き飛ばしました。私はベッドに倒れ込みました。ベッドに倒れ込んだ瞬間、私は目を覚まし、彼の存在を強く感じて叫びました。隣で妻が眠っていました。彼女は私に言いました。「どうしたの？」今日まで、なぜ彼女にそう言ったのか分かりませんが、私の口から出た答えはこうでした。「私は天で人を見ました。」

以前は、自分が成長してクリスチャンの老人になり、90代で亡くなるだろうと思っていました。しかし、2018年にすべてが変わりました。その年、また夢の中で、私は神を見ることはできませんでしたが、神の非常に大きな声を聞きました。この話を聞いている皆さん、これから私が話すことに注意を払ってください。これから話す言葉に注意してください。私が話す言葉はどれも地に落ちることはありません。これらの言葉は神ご自身から来るので、どれも空虚ではありません。つまり、成就するのです。この夢の中で神はこう言いました。「2026年のワールドカップは開催されません。残された人々の地上での生活は、以前と同じではなくなるからです。」そして私は目が覚めました。私はサッカーファンではないので、目が覚めた時は、前回のワールドカップがいつ開催されたのか、次のワールドカップがいつ開催されるのかさえ知りませんでした。後で調べたところ、2026年の男子サッカーワールドカップは主にアメリカ合衆国で開催されることが分かりました。

2018年後半のある朝早く、私は目を覚まし、電気をつけて聖書を読み始めました。すると、白いローブをまとったイエスが目の前に現れました。これは夢ではありませんでした。私は目が覚めていたのです。イエスの顔をじっと見つめていると、イエスは口を開くことなく、心の中でこう言いました。「1948年にイスラエルが建国されてから、出エジプトまで77年かかる。」イエスは「携挙」という言葉は使いませんでしたが、そのことを指しているのだと分かりました。そしてこう付け加えました。「2025年9月23日と24日に、私は教会を連れて来る。この二日間、私が来る日と時刻を知る者は誰もいない。その後、残された者たちのために、地上で7年間の艱難時代が訪れる。2032年9月15日、私は王として地上に戻ってくる。」

こう言った後、イエスは姿を消し、私は驚愕しました。当時、携挙、再臨、そして艱難時代について、私はほとんど知りませんでした。クリスチャンになり始めたばかりの若い頃、ある牧師から、将来、ある艱難時代が訪れ、クリスチャンはそれを経験するだろうと教えられました。それだけしか知りませんでした。携挙を逃れる道があることは知りませんでした。あちこちで耳にしていたかもしれませんが、実際にはほとんど何も知りませんでした。

今では、これらが非常に物議を醸すテーマであることは承知していますが、ある日、神は私にイザヤ書55章を読むように言われました。そこには、「わたしの言葉は一つもわたしを離れず、むなしくわたしのもとに帰って来ることはない」とあります。そして、神は私に教え始める、私の心を通して考え始める、と言われました。私は神ではありませんが、これらの事柄についてより深く理解できるように、神は私の心に考えを植え付けてくださいました。そして、前回の携挙、つまりエリヤの携挙について書かれた列王記下2章1-11節へと私を導いてくださいました。エリヤとエリシャが一緒にいたとき、預言者たちが彼らのところに来てエリシャに尋ねました。「あなたの主君が今日あなたから連れ去られることをご存じですか？」エリシャは彼らに「はい、知っています」と答えました。他の預言者たちも同じように尋ねました。彼らはエリシャに同じ質問をし、エリシャも同じように「はい、知っています」と答えました。ついにエリヤはエリシャに言いました。「私が

あなたから連れ去られる前に、私に何をしてほしいのか教えてください」。こうして私は、エリヤの携挙の日が彼らにとって謎ではなかったことを知りました。実際、神は預言者たち、エリシャ、そしてエリヤにそれを明らかにしておられました。ですから神は、来たるべき携挙においても、同じことをなさることを私に示してくださいました。

そこで私はこのテーマを真剣に学び始めました。そして、神が七つの祭りを定めたこと、そしてイエスが生と死と復活によって、すでにそのうちの四つ、すなわち過越祭、無酵母パンの祭り、初穂祭、そしてペンテコステ祭を成就されたことを知りました。残されたのはラッパの祭り、贖罪の日、そして仮庵祭の 3 つだけです。

レビ記 23 章には、ラッパの祭りが 1 日限りの行事として制定されたことが記されています。それは新月が目視できたことから始まりました。しかし、新月の小さな三日月形の物理的な観測が不確実であったため、1 日だった期間が後に 2 日間に延長されました。最終的に、このラッパの祭りを指すヘブライ語の表現「その日もその時も、だれも知らない」が生まれました。

先ほど述べたように、イエスは「出エジプト」という言葉を使いましたが、それは携挙について語っていました。1948 年のイスラエル建国から 77 年が経ち、ちょうど今年、2025 年になります。

そして 2025 年、9 月 23 日と 24 日はラッパの祭りの 2 日間となります。つまり、この 2 日間が教会の携挙が起こる短い期間となるのです。 7 年後の 2032 年 9 月 15 日は、イエスが王として地上に再臨する贖罪の日です。

では、なぜ彼は私にワールドカップについて話したのでしょうか? テサロニケ人への第一の手紙 5 章 5 節には、世界中に平和と安全が訪れると人々が声高に叫ぶ時が来ると書かれています。少なくとも、これは、来たるべきカリスマ的な反キリストが携挙後に世界に約束するものです。もしかしたら確かに平和が訪れるかもしれませんが、それがどれくらい続くかは分かりません。しかし、2026 年 6 月までに世界は悲惨な混乱に陥り、混沌と破壊があまりにも大きく、FIFA はアメリカ、カナダ、メキシコでワールドカップの試合を開催できなくなるでしょう。

マタイによる福音書 24 章 36 節で、イエスは携挙の日時は誰も知らないと語っています。しかし、インターネットでグーグル検索してみると、この表現は実際にはラッパの祭りを意味するヘブライ語の慣用句だと説明するウェブサイトが見つかります。ラッパの祭りはもともと 1 日限りの祭りで、「新月」が実際に見えることから始まりました。しかし、実際に見えるかどうかが不確実だったため、この 1 日限りの祭りは実際には 2 日間にまで延長されました。つまり、新月、ひいてはラッパの祭り、そして最終的には携挙の日時も、誰も知らなかったと言えるでしょう。

しかし、これは伝統的なユダヤの結婚式の慣習を反映したものでもあります。花婿の父親は結婚式の日取りを決めてから初めて、息子に「花嫁を迎えに行け」と命じます。つまり、結婚式の日時を知るのは息子だけで、父親だけが知っているのです。教会はイエスの花嫁です。ですから、携挙はイエスと教会の結婚式のようなものです。地上では、それは誰も知らない日に起こります。地上の御子でさえも知らず、御父だけが知っています。

そして、コリント人への第一の手紙 15 章 51-52 節を読むと、パウロはイエスの「最後のラ

ッパ」について言及することで同意しています。多くの人は「最後のラッパ」を読むと、黙示録に飛びつき、最後のラッパとは患難時代に第七の天使が吹き鳴らす第七のラッパのことだと言います。これは誤りです。ラッパの祭りの間、角笛は 99 回吹き鳴らされ、続いて 100 回目が吹き鳴らされ、その最後のラッパが「最後のラッパ」なのです。

テサロニケ人への第一の手紙 5 章 1 節には、「兄弟たち、時と日付については、私たちがあなた方に書き送る必要はありません」とあります。パウロがテサロニケの人々に「主の日」の時と日付について書き送る必要はありませんでした。これは、主の日がその後 2000 年間彼らから隠されていた出来事であり、終末時代の教会には明らかにされるからでした。そして 4 節でパウロは、その日は光の中にいる者には驚きではないが、闇の中にいる者には盗人のように驚きを与えると述べています。

ヘブライ人への手紙 10 章 25 節は、私たちに集まりを怠ってはならない、むしろその日が近づいているのを見ているので、ますますそうするように勧めています。そして私はあなた方に言います、それは無作為な日ではなく、近づいているのが見える、定められた時なのです。

使徒行伝 1 章 6-7 節では、イエスの復活後、弟子たちがイエスに尋ねました。「あなたはいつからイスラエルの王になるのですか？」イエスは彼らに言われました。「父がご自分の権威によって定められた時と時期を知ることは、あなた方の役目ではありません。しかし、あなた方はユダヤ、サマリア、そして地の果てに至るまで、わたしの証人となるのです。」言い換えれば、イエスが再臨してイスラエルの王となる時については、彼らの関心事ではないはずです。結局のところ、それは 2000 年後に起こるはずだったのです。

それは、ダニエルが終末の時まで言葉を封印し、その書を封印するように言われたようなものです。ですから、終末の時に教会に啓示が下されるでしょう。終末の時そのものの啓示です。

ですから、私は南アフリカと世界に、イエスが再臨されることを警告するためにこの手紙を書いています。もしあなたの人生にイエスがいないと感じたり、イエスに人生を捧げていないと感じたりしたなら、その時が迫っていることを覚えておいてください。神が人々がイエスを受け入れるために定められた時、神が教会に与えた恵みの期間は終わりを迎えようとしています。すべての人がイエスを受け入れ、救われるように、教会が世界に働きかけるために与えられたのです。

携挙は起こります。南アフリカを含む世界中の何百万ものクリスチャンが一瞬にして消え去ります。クリスチャンが世界から取り去られた後、神の裁きが世界に下るでしょう。

世界は 2026 年のワールドカップに向けて準備を進めています。しかし、2025 年の携挙の後、世界には混乱と破壊、そして荒廃が起こり、2026 年 6 月にはワールドカップの試合は行われなくなります。世界はもはや別世界のようになるでしょう。

ですから、もう一度、皆さんにお願いがあります。どうか時間はたくさんあると思ってはいけません。そんなに多くの時間はありません。私は教会を開くために召されたのではないことを覚えておいてください。かつては、それが神が私に与えてくださった使命だと思っていました。しかし、それ以来、私の使命は、何よりもまず、イエスは生きておられ、間もなく再臨されるということを世界に告げ知らせることだと気づきました。ですから、

世界の皆さん、準備をしてください。すべての罪を捨て、キリストのもとに来てください。そこに救いがあります。終わりの時です。私だけが召されたとは言えませんが、私は神からの最後の召しの一つです。ですから、私はすべての人に訴えます。一般市民、ビジネスマン、著名人、政府大臣、世界中のあらゆる大陸の国の大統領。携挙の時が近づいているのですから、今、イエスにあなたの人生を捧げてください。

2019年、トム・ホーン(Tom Horn)氏がテレビ番組で自身の著書『ワームウッドの予言』について語っているのを見ました。彼は今は亡くなっていますが、番組の中で彼はNASAの職員から、2029年13日（金）に小惑星が地球に衝突するという情報を得たと語っていました。ホーン氏は、その小惑星が黙示録8章に記されている燃える星かもしれないと気づいた時、衝撃のあまり座り込むしかなかったと語っています。もしこの日が7年間の艱難時代の中間点だとしたら、3年半遡ると2025年になります。彼の未来予測は正しかったと言えるでしょう。それは私の予測と基本的に一致しています。

私が最後に大きなビジョンを受けたのは2018年でした。もちろん、それ以来、このことについて話すのは今回が初めてではありません。例えば、国際ポッドキャスト「God's Voice Daily」でも話しました。また、私自身のYouTubeチャンネルも運営しており、そこでもこのメッセージを発信しています。自己宣伝を目的にしているわけではないので、ここでチャンネル名は伏せます。

イエスは西暦32年に亡くなり、埋葬され、復活し、天に昇られました。聖書学者の中には、イエスは2000年間姿を消した後、再び現れると信じている人もいます。西暦32年に2000年を加えると、キリストの再臨の年は2032年になります。しかし、その前に7年間の艱難時代があるので、2032年から7年を引くと、今年、2025年になります！

きっと多くの人が、これまでにも同じような日付を設定したことがあると言うでしょう。しかし、それらはすべて無駄になってしまいました。しかし、今回はそうではありません。私は、教会の携挙が今年の9月23日か24日に起こると10億パーセント確信しています。私は世界中の人々に、このことに備えるようお願いします。イエスにあなたの人生を捧げてください。イエスは道であり、真理であり、命なのです。彼は神です。